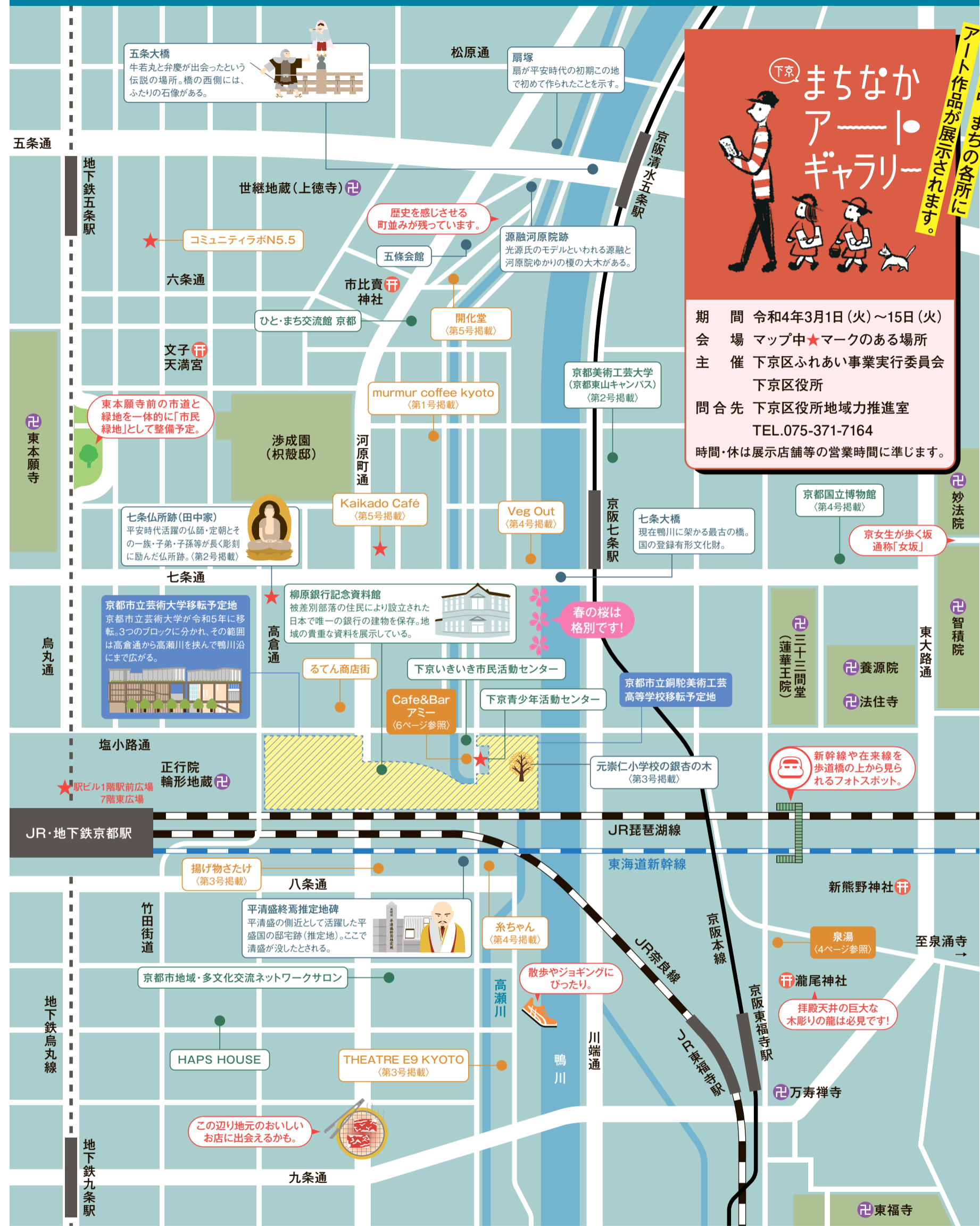


／お散歩しながら、このまちの文化と出会う。／

5 TO 9 Walking MAP



期間中、まちの各所にアート作品が展示されます。

「下京 まちなかアートギャラリー」

期間 令和4年3月1日(火)～15日(火)
会場 マップ中★マークのある場所
主催 下京区ふれあい事業実行委員会
下京区役所
問合せ先 下京区役所地域推進室
TEL.075-371-7164
時間・休は展示店舗等の営業時間に準じます。

京都駅東部エリアのカルチャーを発信。

5 TO 9

KYOTO East side CULTURE JOURNAL



御意見・御感想大募集!

5TO9(ゴートゥ・ナイン)への御意見・御感想の他、「こんな素敵な人がいる! あんな素敵な場所がある!」という情報をぜひお寄せください!

※いただいた内容は、誌面上で紹介する場合がございます。

【お送り先】▶京都市総合企画局プロジェクト推進室 TEL.075-222-3176(土、日、祝を除く 午前8:45～午後5:30) FAX.075-213-0443
〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地 ☒project@city.kyoto.lg.jp



February 2022

vol. 06

**水に惹かれて京都へ。
川沿いを歩き、人の物語を聞く。**

ロシアに生まれ育ったエレナさんは平成24年に来日、3年前から京都に暮らしながら創作を行っている。「京都に来たのは水に惹かれたから。洋の東西を問わず街は水がある所につくられるので、水をテーマにすると街のいろいろなことが見えてくると考えたんです。とりわけ京都は川を中心にそれほど大きくないスケールで市街地が構成されているため、水と暮らしが密接につながっています。水が豊かな京都は生命力に満ち、そんな街に暮らす人は日々何を感じているのか。実際に生活と作品制作を行うことで、それを知りたいと思いました。」

エレナさんの創作は、歩くことをとおして、そこがどんな場所かを知ることから始まる。「京都に来てすぐに鴨川の上流まで歩きました。疏水沿いを琵琶湖まで歩いたこともあるし、高瀬川の源流から九条まで歩いたこともあります」。ひたすら歩き、水の音の調査・録音などを行ううちに、「京都のあちこち

が水でつながっているのが分かり、水に沿って歩くと空気の変化が感じられたり、京都の歴史が目に見えたりするようになりました。」

エレナさんはそこに暮らす人がどういふふうに見て、何を思い、どのように世界を認識するかということにも関心があるという。「これまでに北海道や瀬戸内海の島などさまざまな土地で多く



作品「女木島」／京都市中京区・壬生にあるスペースSODAで2021年11月に開催されたアーティスト・ランニング・フェスティバルで展示したセラミック(陶器)。

の人とかかわり、いろいろな話を聞きました。それはその方が住んでいる世界、つまりその土地や気候についてどう思っているのか、昔どんなことを体験したかといった、それぞれの人の物語です」。その物語をどう表すかは、物語ごとに適した方法があると考えている。「言葉でしか表せないものがあり、京都に来てから詩を書くようになりました。時間の多様性を表現するには映像が良いし、写真の場合は撮りためると後から見えてくるものがあります。最近はドローイング(線画)もよく描いています。しかし何でも良いわけではなく、常に土地の詩学を見出す方法を探っています」。

**歩く、人と関わる、考える。
そのすべてを作品につなげる。**

歩くことは「世界を直接に経験すること」だとエレナさんはいう。「実際の経験、つまり外に出て、何かを感じるのがなぜ大事なのか。コロナ禍で家にこもることで多くの人がそのことを実感したと思います。

エレナ・トゥタッチコワさんが語る、京都での暮らしと創作。



アーティスト | エレナ・トゥタッチコワ (Elena Tutatchikova)

1984年、ロシア、モスクワ生まれ。人間の風景認識や物語創造、歩行と想像力の関係に関心を抱く。さまざまな土地で、歩き、人とかかわりながら、土地に秘めた物語を探り、写真、映像、文章、ドローイングなどで表現する。作品制作、執筆活動を行う一方で、近年は「歩行」という世界の道づくりを表現方法としてとらえ、ウォーキングや地図作りのイベントを行う。モスクワでクラシック音楽や日本の文学を学んだ後、2012年より日本へ渡る。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。博士(美術)。単著(作品集)に「林檎が木から落ちるとき、音が生まれる」(torch press, 2016)がある。近年の主な個展に「Days With the Wind」(風の日は鳥を歩く)高松アーティスト・イン・レジデンス2020(女木島、高松市、2021年)、「Walk in Progress」(Kousagisha gallery, 京都、2020)、「道は半島をゆく」(知床半島内の複数会場、2018)、「On Teto's Trail」(Gallery Trax, 山梨、2017)、グループ展に「FACES」(SCAI PIRAMIDE, 東京、2021)、「Land and Beyond」大地の声をたどる(ポーラ ミュージアム アネック、東京、2021)、「茨城県北芸術祭」(2016)などがある。

5 TO 9 Elena Tutatchikova on living and creating in Kyoto

Special Interview



「京都ウォータースケープス」／ワークショップシリーズ「音の足跡、音の形」(講師:柳沢英輔さん、大田高充さん、エレナさん)場所:哲学の道近く 撮影:亀村桂宏

人が人であり続けるためには思考力や想像力が必要です。それらを育てるのは実際の経験であり、私にとっては歩くことがそれにあたります」。歩くスピードは、人がいろいろなことを吸収するのに適しているという。「周りの景色を見たり、匂いを感じたり、立ち止まって何かを観察することもできます。このような行為を繰り返すことで、人は見慣れた風景を毎回異なる視点で見られるようになり、さらにこの場所は自分にとってどんな所なのかといった、自分と土地との関係性や距離感を考えられるようになります。歩くということは知的な作業なんです」。

エレナさんにとって作品制作とは、今日はひとつ絵を描いたとか、写真を10枚撮ったとか、そういうことだけではない。「歩いたり、見たりするのも制作過程の中にあるものです。京都で過ごす時間は制作も生活も、どちらも重要であり、このような毎日から得たことが作品につながっています」。

だからこそ、エレナさんには人とかかわるとき、いつも大切にしていることがある。「制作に協力してくれる相手とは、互いに何かを得られる関係を築くよう心掛けています。その人に時間を与えてもらっ



2019年、kumagusuku(京都)／ポエトリーカフェという朗読イベントにて。 撮影:山根香

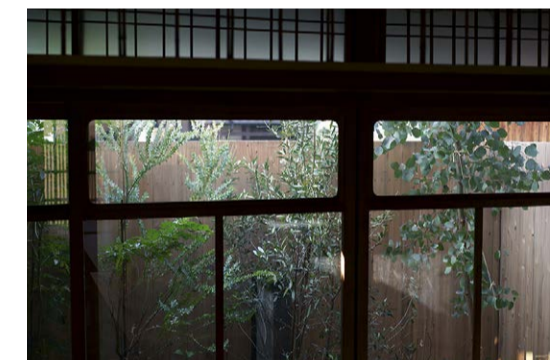
ているのだから、それをどのような表現によって返すべきか考えながら制作に臨むのが私の役割です」。

**人との距離が近い京都。
恵まれた環境を成長に活かす。**

エレナさんはアトリエとして利用している町家で庭づくりにも取り組んでいるという。「土は本当に不思議です。なぜ数年前に採取した種を土に植えると、たったひと晩で植物の芽が出るのか。単純な問いに思えるかもしれませんが、アーティストにはこのようなこと、つまり生命とは何かを考える環境が

必要だと庭をつくることで再確認しました」。この経験から、アーティストを目指す人に庭づくりを勧める。「弱そうなものが意外と強かったり、強そうに見えるものが植えてひと月後に枯れてしまったり、予想外のことがたびたび起きます。また、庭を育てるには時間をかけてさまざまなことを観察する必要があります。このような行為は制作にもつながります」。

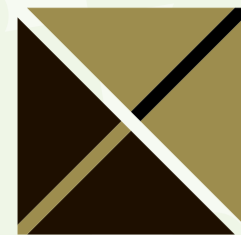
令和5年度に京都芸大が京都駅東部エリアに移転するが、アーティストの先輩として京都芸大の学生にこんなメッセージを寄せてくれた。「自分の専門以外にも関心を持ってほしい。そうすると世界が広がります。アーティストとしての可能性も広がります。一人で集中して作品を作ることに取り組むことも大切ですが、それと同じくらい、人と交流する時間も大切です。京都に暮らしていると、喫茶店やパン屋、郵便局の人たちとしゃべることが多いと感じます。それだけ京都は人との距離が近い街なんだと思います。人と関わることは楽しいことです、その関わりは作品制作にも繋がるかもしれない。このような恵まれた環境を自分の成長に活かしてほしいですね」。



エレナさんのスタジオの庭

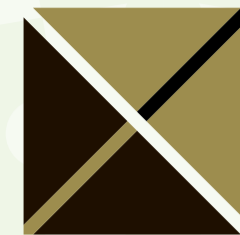


2021年、鴨川の源流まで歩いたときに撮ったインスタントフィルム写真。



アート作品
Artwork

若いアーティストが京都市立芸術大学移転予定地を題材にしたアート作品を制作していく「移りゆくまち」プロジェクト。今回は同大学の大学院で学ぶ前瑞紀さんが、銭湯を舞台に創作に取り組んだ。



作品展
Exhibition of artwork

アート作品でつながる
若手アーティストと地域。

前さんの作品が展示される「泉湯」(JR・京阪「東福寺駅」から北へ徒歩3分)を訪れ、御主人の新谷慶一さんにお話を伺った。



人と関わり、人と人をつなぎ、
街に溶け込む。



アーティスト 前瑞紀さん
奈良県出身。京都市立芸術大学美術学部工芸科陶磁器専攻卒業。2020年、同大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻構想設計に入学。

銭湯でお客様と一緒に作品づくり。

前さんは大学では陶磁器を専攻していたが、大学院では焼き物にとらわれず、人との関わりをテーマにした創作に取り組んでいる。その理由について「多くの人と接するなかで自分にはない経験や、自分とは違う考えを聞くことで刺激を受けたり元気が出たりするから」と語る。

今回のプロジェクトの舞台は、京都芸大の移転予定地から歩いて10分ほどの所にある銭湯。そこで制作することが決まってから前さんは清掃や番台のアルバイトを始めた。いろいろな人と出会う中でお客様と一緒に何か創りたいと、次のようなアイデアを考えついた。「お客様に絵ハガキ大の紙を渡してそこに文章や絵を描いてもらう。それを私がシルクスクリンで転写し「作品」として下足箱の扉に貼ったら面白そうだったんです。それから試行錯誤を重ね、最近「今日の晩ごはん」に関する作品づくりをお客様と取り組んでいる。「日付を入れて「ハヤシライス」とシンプルに書く人もいれば、お鍋の具材一式と「シメはうどんとビール2本」と献立を具体的に記す人もいます。また小さな子どもは家族や女の子の絵を描いてくれたりと作品の内容はさまざまです」。

作品を通してお客様同士をつなぐ。

創作とアルバイトを通じて、この街の人が生活しているところに入れてもらっているのを感じるの。気がさく人が多く、「気をつけて帰りや」とかよく話し掛けてもらっています。お客様の中には秋田県の芸大に通っていた方もいたり、本当にいろんな人と知り合うことができました。アルバイトを始める前は、街の人の暮らしの一部みたいなところに外の人間が入って大丈夫かなと緊張していたのですが、今ではそんなこともなくなりました。オーナーの娘さんと間違われたこともありましたが前さんは笑顔で語る。

作品を通してお客様同士がつながるのも面白い。「これ知ってる子の絵やわ」と言って、おばあちゃんが喜んでくれたときは私もうれしかったです。あと「幸福になれる社会になりますように」と書いた人がいて、それを見た他のお客

さんがとても感動し、書いた人に「ぜひありがとうと伝えておいて」と言われたこともありました」。

人と出会い、創作の可能性を広げる。

銭湯に関心を持ったきっかけは、大学の卒業制作の展示のため京都芸大の移転予定地を訪れた時にさかのぼる。「どんな街かなと思って歩き回っていた時に銭湯があるのを教えてもらい、ふらっと入ってみました。すると地域の人たちのサロンみたいな雰囲気や、お客様同士気軽に話し合っている様子がとても魅力的でした。その銭湯では知り合いもでき、制作を手伝ってもらったこともあるという。「その出会いにより、人との関わりを通して自分の世界がもっと広がることにあらためて気付きました。移転予定地周辺には京都芸大と一緒に何かやりたいと言ってくれる方やお店も多いので、移転したら学外の人もかかわりながら、創作の幅を広げたり面白いことができたらいなあと思います」。

前さんは移転時には大学院を修了している予定だが、こんな思いを持っている。「今お世話になっている銭湯、そして京都芸大移転予定地の近所の人たちと卒業した後ももう少しかかわっていきたいです。住みやすそうで面白い人たちがたくさんいるので、引っ越しそうか、今悩んでいるところです(笑)」。



大正8年(1919)開業の「泉湯」について教えてください。

新谷さん

祖父が始めて私で3代目です。お客様は近所の方が中心で、今59歳の私が生まれたころから常連というお客様も多く、店の雰囲気は地域のサロンみたいな感じです。私が大切にしているのは、お客様にすっきりしてもらい、帰るときに「今日気持ちよかったです」と思ってもらうことです。例えば湯の温度。日や季節によって温度を変えてはいますが、うちは昔ながらの熱めのお湯でさっぱりしてもらえるようにしています。

前さん

初めてここにお邪魔したとき、掃除している人たちがとても楽しそうで、私もぜひやってみようと思いました。

新谷さん

「汗かくし、しんどいで」と忠告したんやけど、これもなにかの縁。まさか、番台のアルバイトまでやってくれるとは思わなかった(笑)。

作品の展示依頼があったときの感想は？

新谷さん

基本的に変ったことをするのは得意ではなく、また、芸術はよく分からない分野です。でも、だからこそ楽しみで、「やりたいようにやって」と伝えました。お客様に何かを書いて(描いて)もらうというアイデアは、とても面白い。人と人のつながりが途絶えがちな世の中、特にコロナ禍の今、人と接する大事さを感じられるのがいいし、それはうちの商売にも合うと思ったんです。子どもの絵を見て「癒やされる」とおっしゃるなど、お客様の評判も上々です。



前さん

ありがとうございます。「なんでもやってみたらええやん」と温かく後押ししてもらったからこそ、自分のやりたいことができました。新谷さんはサウナ用ののこの自作されるなど、無いものは自分でつくるというスタンスを大切にされていて、その姿勢に影響され、今回の制作では自分で漉いた紙を使っています。

新谷さん

うちみたいなのは、何でも自分でやらないと商売にならない。とにかくやってみて、違うと思ったら軌道修正したい。芸術も商売もなんでもそうちゃうかな。うまい下手ではなく、やってみる。まわりにある材料でひとまずやってみることが大事な気がします。

前さん

芸大の学びは基本的に与えられるものではなく、試行錯誤しながら自分で見つけていく感じがします。でも、私は「うまくいかなかったらどうしよう」と、ネガティブに考えてしまうことが多いんです。今回も制作を開始した後、悩むこともいろいろあるなかで新谷さんはいろいろ相談に乗ってくださり、勇気づけてくださいました。

新谷さん

まあ、そう思ってくれたらうれしいね。

京都市立芸術大学の移転についてどう思いますか？

新谷さん

学生さんが来ると、京都芸大のまわりの地域は今よりもっと活気づくのではと期待しています。若い人のエネルギーはすごいやろうからね。もちろん、銭湯にも来てさっぱり気持ちよくなってほしい。また前さんのように、ここを表現や創作の場として使ってもらえるのもええかなと考えています。

前さん

京都芸大には音楽学部もあるんですよ。

新谷さん

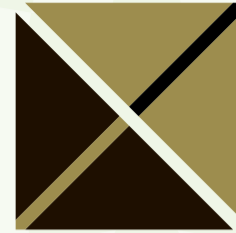
そしたらもっといろんなことができそうやね。まあ、店の雰囲気がだいぶ変わってお客様がびっくりするかもしれへんけど(笑)。でも、銭湯ってただ風呂に入るだけではなく、誰かとしゃべったり交流できるのも魅力のひとつとっているので、学生さんの表現や創作が地域とつながるきっかけになればうれしいね。作品も人に見てもらってなんぼのものと思うので、うちができることを学生さんと一緒に考えていきたいです。

作品展示は3月31日(木)まで実施しています。



泉湯 / 営業時間 15:00~23:00
金曜日(第一週のみ木曜及び金曜日)
TEL.075-561-3147





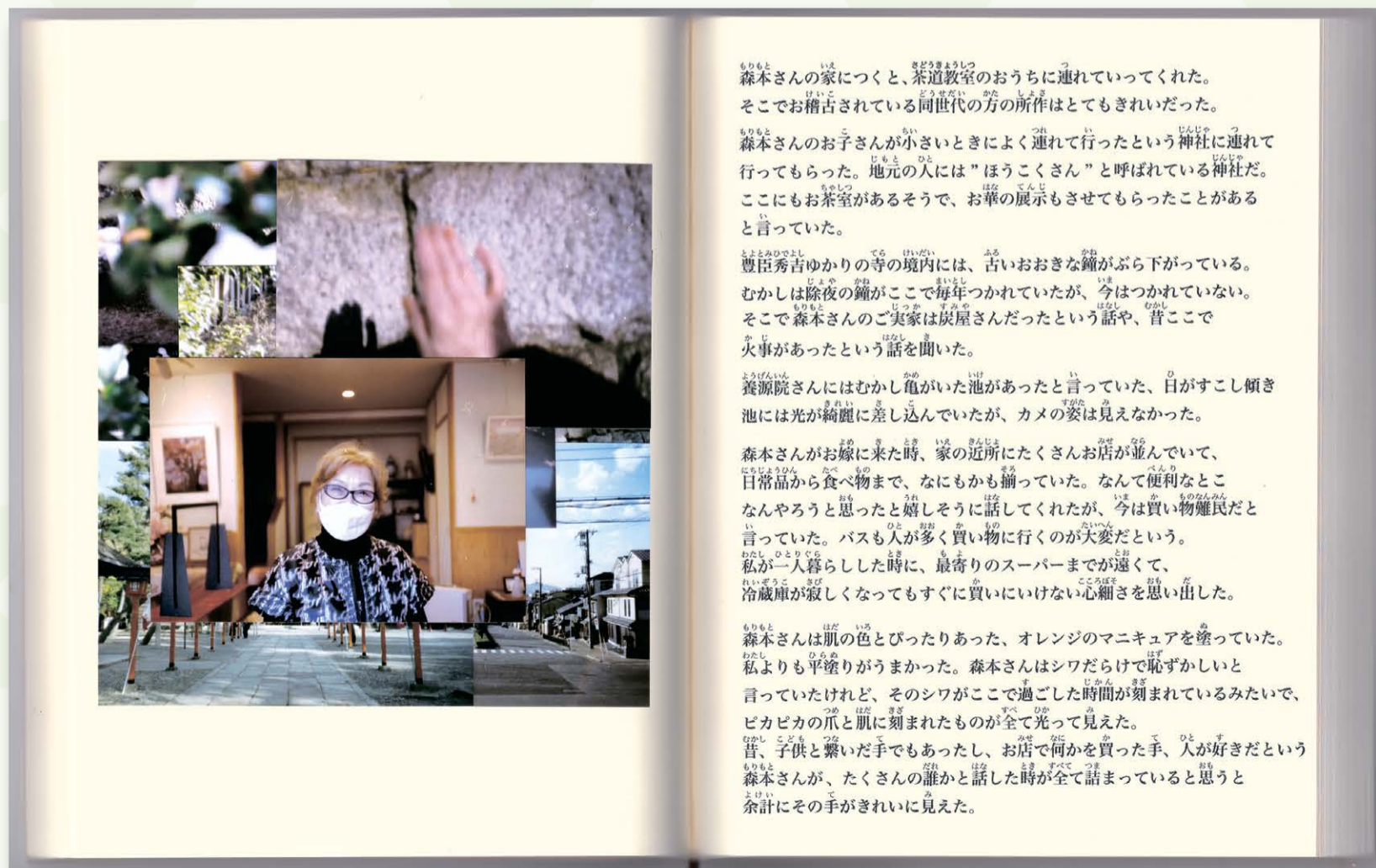
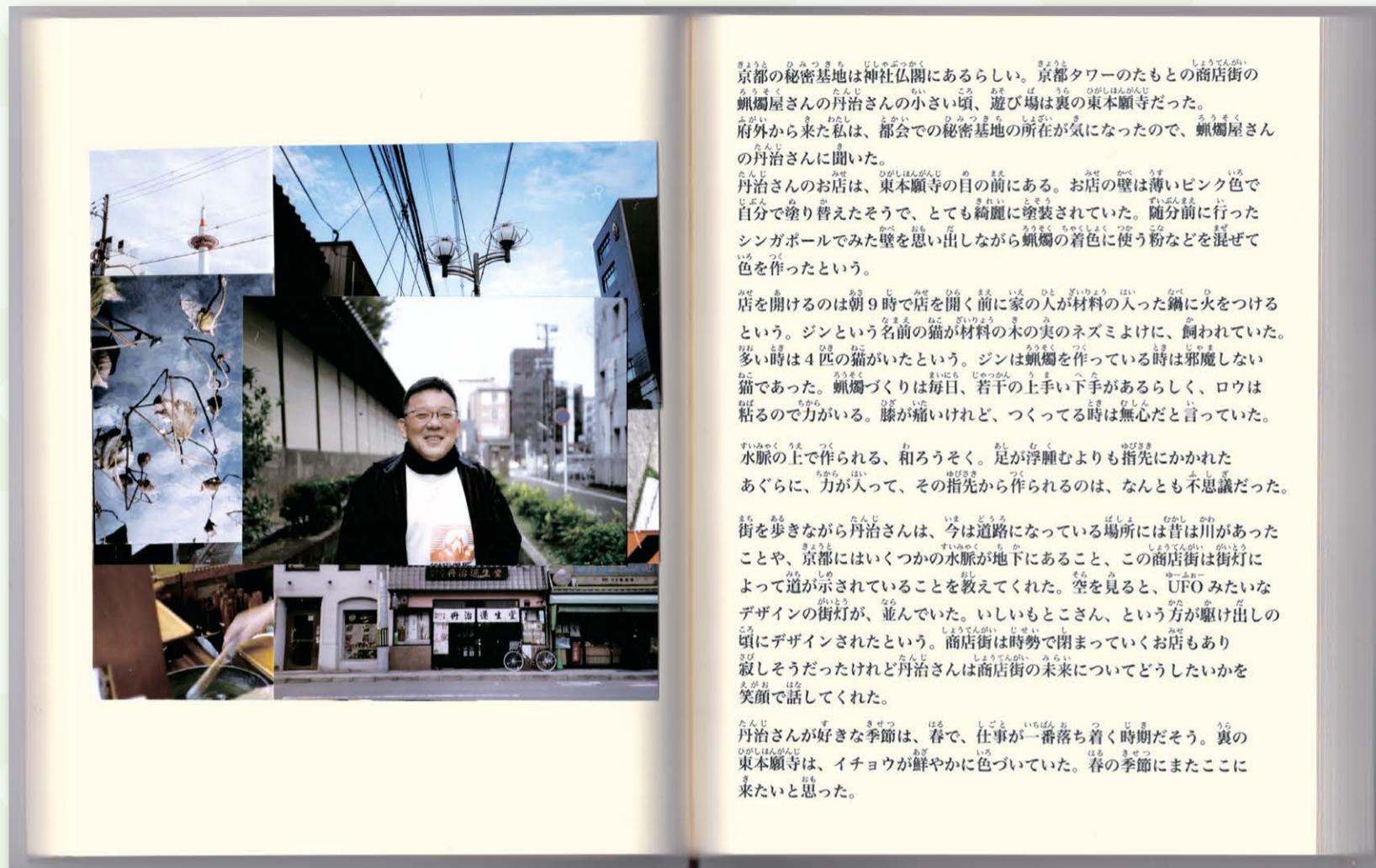
アート
作品
Artwork

作品名— 街の話 (七条通編)

京都市立芸術大学の大学院で学びながら写真を用いた作品づくりをしている清水花菜さんが、前号掲載の「高瀬川編」に続き、同大学移転予定地近くの七条通沿いを丹治潔さん(七条商店街振興組合理事長)と森本好子さん(貞教自治連合会前会長)と一緒に歩いた。



アーティスト 清水花菜さん



from
京都市立
芸術大学

息を吹き返した楽器が奏でる音を
思い思いに楽しんでほしい。

京都市立芸術大学の音楽学部の学生を中心に結成された副産物楽団ゾンビーズ。この春に京都芸大の移転予定地周辺での演奏会を予定している楽団の3人のメンバーに、自分たちの音楽や地域との関わりについて話してもらった。



左から 作曲専攻 3回生 土方渚紗(ひじかた なぎさ)さん / 声楽専攻 4回生 神林優美(かんばやし ゆみ)さん / ピアノ専攻 4回生 森川歩美(もりかわ あゆみ)さん

副産物楽団ゾンビーズについて
教えてください。

神林さん

壊れてしまったり、使われなくなった楽器を音楽の副産物と捉え、それらの楽器を再び鳴らすことで音を蘇らせようと思ったのが副産物楽団ゾンビーズです。



土方さん

使われなくなったといっても、クラシックのコンサートなど型が決まった場で使えないだけで、それぞれの楽器がそれぞれの音を鳴らすことはできます。「ゾンビーズ」は息を吹き返した楽器という意味で付けられました。また彫刻専攻の院生が作品をつくった際に余った鉄パイプや、ゴミ捨て場にあった木の板などを打楽器として演奏に使っています。そうすると、自分たちのまわりには、今まで知っていた楽器の音だけではなく、たくさん音があることに気づかされます。



使われなくなった電子オルガン。

神林さん

結成のきっかけは昨年4月に、京都芸大の移転予定地にほど近い「Cafe&Bar アミー」さんで、使われなくなった電子オルガンの演奏会をしたこと。ゾンビーズとしては昨年11月に京都芸大のギャラリーでデビューしました。

森川さん

神林さんに誘われてアミーさんで定期的に電子オルガンを弾くようになり、晴れてメンバーになりました。ちなみに現在(令和3年12月)のメンバーは10名です。

土方さん

作曲専攻の私はゾンビーズのテーマソングをつくりました。個性的な楽器が出す多彩な音色を生かした不思議な和音が響く、リズム感あふれる曲で、ちょっと大きめに多様性を表しています。

森川さん

多くの人を知っているクラシック曲には「決まりごと」みたいな暗黙のルールがあったりしますが、ゾンビーズの場合はそれがありません。だから音を思い思いに楽しむという音楽の原点に立ち戻れ、その喜びが聴く人にも伝わればと思います。

今後の予定は。

神林さん

近々、アミーさんで演奏会と楽器の展示会を行う予定です。移転予定地周辺の児童館やデイサービスセンターでも演奏したいですね。美術学部の一部の学生は元崇仁小学校での展示などで移転予定地に行ったことがあると思うのですが、音楽学部の学生はあまりないような気がします。今回の企画が、多くの芸大生が移転予定地に足を運ぶきっかけになったらうれしいです。

美術作品の制作現場で生まれる
廃材を組み合わせでつくった楽器。



京都芸大の移転に
どんなことを期待していますか。

神林さん

音って自然と耳に入ってくるものです。芸大が移転したらキャンパスから音楽や歌声がまちに漏れ聞こえてくると思います。地域の方にはそうしたことをとおして芸大を身近に感じてほしいですね。

森川さん

芸大の音楽学部という何かと難しく思われがちですが、実はそうではないということ、ゾンビーズなどの演奏を楽しみながら地域の方にわかっていただければと思います。

土方さん

移転時には大学を卒業していますが、いつまでも地域と積極的に関わってたいですね。ところで芸大移転の際には副産物がたくさん生まれると思うので、ゾンビーズの演奏はますますパワーアップします。ぜひご期待ください!

展覧会

「オルガンを鳴らす vol.2」

令和4年3月12日(土)～21日(月・祝)

会場: Cafe&Barアミー (裏表紙「Walking MAP」参照)

京都市下京区下之町1-1 日曜休 / 時間: 8時～15時

♪展覧会期間中、3月12日(土)・19日(土)演奏会を開催します。♪

時間: 14時～ 演奏: 山田毅・神林優美・高橋萌・他